

原著

子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージが 養育者の育児上の気づきと認識に及ぼす影響

武井祐子*¹ 門田昌子*¹ 竹内いつ子*¹ 岩藤百香*²
岡野維新*¹ 寺崎正治*¹

要 約

本研究の目的は、養育者が子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージを体験後、育児をする上でどのような気づきがあるのか、また自分自身や子どもの変化に対する認識にどのような影響を及ぼすのかについて、子どもの気質特徴の2つのタイプ別に明らかにし、子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージのより効果的な導入方法を提案することである。回答が得られた61名を分析した結果、気質特徴によらず、子どもの特徴への気づきにつながり、自身がどのように子どもに関わるかについて考えるきっかけになること、育てにくい、扱いにくい気質特徴を示す子どもの養育者においては、子どもの気質特徴を踏まえた育児行動につながることで、育てやすい、扱いやすい気質特徴を示す子どもの養育者においては、子どもの気質特徴を意識しながらも育児行動全般を見直すことが示唆された。養育者が子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージを体験する際には、子どもの気質特徴の違いによって、異なる提案の方法が可能であることが明らかとなった。

1. 緒言

乳幼児期において扱いにくい気質特徴を示す子どもであった場合、母親の育児不安は高まることが指摘されている¹⁾。気質特徴とは、体質的な基盤をもち、個人の行動特徴に一貫性をもたらす、ある程度の発達の連続性をもち、発達初期から明らかになる個人差と考えられている。水野²⁾は、発達心理学領域における気質概念を整理し、体質的なものであること、乳児期にあらわれ、ある程度の発達の連続性をもつこと、客観的に判断できる個人差であること、環境の影響を受けて変化しうると考える点が共通した気質概念であるとしている。しかし、気質特徴が観察可能な行動特徴として表現されると理解するならば、気質特徴そのものが変化するというよりも、環境との相互作用の結果、表現される行動が変化すると理解することも可能である。つまり、子どもの気質特徴は、子どもに対する養育者の関わり方によって変化する、養育者と子どもとの間の相互作用の中で示される行動特徴と考えられる。

武井ら³⁾は、養育者が日常生活のなかで子どもの気質特徴をどのように認知しているかを明らかにし、そのなかの特定の気質特徴が養育者の育児不安や育児ストレスを高めることを明らかにした。さらに武井ら⁴⁾は、養育者の育児不安を低減するためには、子どもの気質特徴に適合した育児行動が出来るという育児自己効力感を高めることが重要であると指摘している。養育者の育児自己効力感が高まり、育児不安が低減すれば、養育者の子どもへの関わり方は健全なものとなり、養育者と子どもの相互作用の中で示される子どもの気質特徴も適応的に発達していくと考えられる。

養育者の育児に対する自己効力感を高める具体的な関わり方のひとつとして、ベビーマッサージがある。母親が行うベビーマッサージは、自然に我が子と触れあうことができ、その行為自体が母子相互作用を高める。さらに、ベビーマッサージ体験がある母親の育児不安や育児ストレスは、その体験がない母親よりも低い⁵⁾。ベビーマッサージによって、母親は

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科

(連絡先) 武井祐子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: takei@mw.kawasaki-m.ac.jp

子どもの性質をより正確に感じ取ることができ、タッチを通して子どもの心と体の不調を感じ取れるなどの効果がある⁶⁾。ベビーマッサージを通した触れ合いにより、親には「育てる力」が育まれる⁷⁾。

武井ら⁸⁾は、養育者が気質特徴に適合したベビーマッサージを自身の子どもに実施する体験をすると、その後の1ヶ月の間に、母親の半数以上が日常生活の中で、毎日あるいは2日に1回程度は、自身の子どもにベビーマッサージを実施するようになることを明らかにしている。また、子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージは、養育者の育児認識に肯定的な効果をもたらす、肯定的な育児行動につながるだけでなく⁹⁾、ベビーマッサージの実施頻度が低くても、養育者の育児自己効力感を高め、育児不安を低減することが明らかとなっている⁸⁾。つまり、気質特徴に適合したベビーマッサージは日常生活に取り入れやすく、かつ取り入れる頻度や実施する時間帯によらず、養育者の育児自己効力感を高め、育児不安を低減させる育児行動であると考えられる。

武井ら⁸⁾は、子どもの気質特徴を2つのタイプに分類し、気質特徴に適合したベビーマッサージが日常生活の中で養育者が抱く育児不安、育児自己効力感にどのような影響を与えるのかを明らかにした。武井ら⁸⁾が分類した気質特徴のタイプの1つは、癩癪が激しく、不機嫌など否定的な感情を激しくあらわし、新しい環境や人に慣れにくく、臆病で大人しい気質特徴であった。また、もう1つのタイプは、穏やかで機嫌がよく、人見知りをせず、積極的に、身体を使った活発な遊びや人と遊ぶことを好む気質特徴であった。癩癪が激しい気質特徴は、養育者の育児不安を高めることが指摘されている³⁾。また、養育者が子どもを扱いにくいと認知する主な理由は、環境への慣れにくさ・過敏さ、反抗、自己主張だと報告されている¹⁰⁾。つまり、武井ら⁸⁾の研究で分類された前者の気質特徴のタイプは、養育者にとって“育てにくい、扱いにくい”と認知され、養育者の育児不安を高める気質特徴と考えられる。一方、武井ら⁸⁾の研究で分類された後者の気質特徴のタイプの子どもは、養育者にとって“育てやすい、扱いやすい”と認知される気質特徴をもつ子どもだと考えられる。武井ら⁸⁾の調査では、これらの全く異なる2つの子どもの気質特徴のタイプのどちらにおいても、母親が子どもの気質特徴を理解し、子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージを体験することは、育児に対する漠然とした不安および子どもや養育に対する忌避感情といった育児不安を低減させること、子どもへの接し方についての育児効力感を高めることが明らかにされている。

一方、子どもの特徴によって異なる困難感を感じる養育者に対しては、それぞれの子どもの気質特徴に適合した関わりを助言するなどの支援をする必要があると指摘されている^{3,4)}。つまり、育てにくい、扱いにくい気質特徴と育てやすい、扱いやすい気質特徴という2つの異なる気質特徴を示した場合、養育者にはそれぞれの気質特徴に適合した関わりについて助言をする必要がある。武井ら⁸⁾の研究においても、育てにくい、扱いにくい気質特徴のタイプの子どもの養育者と育てやすい、扱いやすい気質特徴のタイプの養育者には異なるベビーマッサージが提案されている。結果的には養育者の育児自己効力感と育児不安に対しては、育児に対する漠然とした不安および子どもや養育に対する忌避感情を低減させること、子どもへの接し方についての育児効力感を高めるという同様の効果が認められたが、それぞれのように気質特徴に適合したベビーマッサージを体験し、子どもへの効果を認識したのかについては明らかになっていない。子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージを体験することで、養育者が育児をする上でどのような気づきがあるのか、また養育者自身や子どもの変化に対してどのような認識を抱くのかについて、子どもの2つの気質特徴別に検証することは、子どもの気質特徴の違いによって異なる困難感を抱く養育者に、気質特徴に適合したベビーマッサージを効果的に導入するための提案や助言を可能にすると考えられる。そこで、本研究は0歳から3歳までの乳幼児を育てる養育者を対象に、育てやすい、扱いやすい気質特徴と育てにくい、扱いにくい気質特徴という2つの気質特徴をとりあげ、それぞれの気質特徴に適合したベビーマッサージを体験後に、養育者がどのように認識したかを明らかにし、より効果的な気質特徴のタイプごとの適切な導入方法や助言内容を検討することを目的として実施する。

2. 方法

2.1 調査期間

平成28年8月～平成30年3月にA市内にある子育て広場とB市およびC市にあるベビーマッサージサロンで実施した。

2.2 被調査者

A市にある大学の子育て広場を利用する母子および自身の子どもにベビーマッサージをする目的でB市およびC市のベビーマッサージサロンに所した母子のなかで参加協力が得られた0歳から3歳児とその母親85組であった。参加申込み時の母親の平均年齢は33.6歳 (SD4.20)、子どもの平均月齢は13.35ヶ月

月 (SD6.78) であり、男児48名、女児37名であった。このうち、気質特徴に適合したベビーマッサージ教室に参加し、かつ1ヶ月後に回答するよう求めたアンケートを含む全てのアンケートに回答した61組が分析対象であった。

2.3 調査内容

2.3.1 幼児気質質問紙

武井ら¹¹⁾によって作成された幼児気質質問紙を使用した。具体的内容は、子どもの最近の状態(この1ヶ月)についての回答を求めるものであり、否定的感情反応尺度(9項目)、神経質尺度(10項目)、順応性尺度(6項目)、外向性尺度(8項目)、規則性尺度(7項目)、注意の転導性尺度(7項目)の6尺度47項目で構成される。各尺度の回答は、「1:全くみられない」「2:ほとんどみられない」「3:時々みられる」「4:いつもみられる」の4段階で評定された。なお、各尺度の評定が高いほどその気質特徴を強く表わす子どもであることを示すが、順応性尺度においては、得点が高いほど順応性の気質特徴を強く表わさないことを示す。

2.3.2 自由記述質問紙

「気質質問紙の結果をふまえ、最近のお子さんの気質特徴についてどのように思われていますか」(設問1)、「気質特徴に適合したベビーマッサージのレッスンを受けて、何か気づかれたことや、分かったことがありましたか」(設問2)、「気質特徴を知って、プログラムを受けて、ご自身やお子さんに変化はありましたか、例えばよかった点や、少し頑張った点などを教えてください」(設問3)という3つの質問項目について回答を求めた。

2.4 手続き

A市では子育て広場、児童館そして保育園、B市とC市ではベビーマッサージサロンの責任者に調査について説明し、署名で同意を得た後、同意を得られた施設に実施日の約1ヶ月前にチラシを貼るなどして参加募集を行った。参加募集のチラシでは、調査対象となる子どもの年齢が原則2歳までであること、気質質問紙や育児に関わる質問紙などへの回答を求めること、調査の内容および調査の流れ、調査日時、調査場所、申込み方法を説明した。参加申込みのあった対象者に研究協力をお願い、同意書および同意撤回書、幼児気質質問紙を手渡し、同意書および2つの質問紙に回答を求めた。以上の手続きを経た親子を対象に、1回に8組程度までで、A市内にある子育て広場、B市およびC市にあるベビーマッサージサロンで、1時間程度の気質特徴に適合したベビーマッサージの教室を1回実施した。教室では、養育者に子どもの気質特徴について簡単に説

明を行った後、養育者が回答した幼児気質質問紙の結果に基づき、書面にて個別に子どもの気質特徴の結果をフィードバックした。その後、40分程度のベビーマッサージを実施した。ベビーマッサージは簡単に概要と効果を説明後、予備調査の結果⁹⁾を参考に武井ら¹²⁾が作成した気質特徴に合ったベビーマッサージの内容を、各気質特徴と気質特徴に合ったベビーマッサージを紹介する15ページのパンフレット形式のMyふれあいBookを用いてインストラクターが養育者に伝えた。具体的には、6つの気質特徴ごとに、各気質特徴が高い場合と低い場合に分けて、くびからこしのなでおろしのマッサージ、おなかのマッサージ、むねのマッサージ、あたまのマッサージなど、各気質特徴に適合したベビーマッサージの仕方やポイントをインストラクターが養育者に伝え、養育者自身が自身の子どもにベビーマッサージを行った。気質特徴に適合したベビーマッサージの体験1ヶ月後に養育者に自由記述質問紙への回答、返送を求めた。

2.5 分析方法

武井ら⁸⁾の結果に基づき、子どもの気質特徴をクラスター分析によって2つのタイプに分け、気質特徴に適合したベビーマッサージ教室体験後の育児認識についての自由記述を整理した。得られた2つの気質特徴タイプごとに、自由記述質問紙より得られた回答について、養育者がどのように気質特徴に適合したベビーマッサージを体験し、子どもへの効果を認識したのかについて明らかにするために、設問2と設問3について自由記述の内容を整理した。自由記述はKJ法によって分析を行った。分析は心理学を専門とする大学教員3名で行った。

2.6 倫理的配慮

本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を受けた(承認番号16-021号)。「研究協力お願い」の文書には、得られたデータは厳重に保管し、研究以外の目的で使用しないこと、個人が特定されることはないことを明記した。

3. 結果

3.1 気質特徴の違いによるタイプ分け

武井ら⁸⁾の結果に基づき、6つの子どもの気質特徴について、Ward法によるクラスター分析を行い、2つのタイプに分類した。気質特徴クラスター1(以下C1)は38名であり、気質特徴クラスター2(以下C2)は23名であった。C1とC2の気質特徴を確認するため、クラスターを独立変数、6つの気質尺度得点を従属変数とする対応のないt検定を行った(表1)。結果、否定的感情反応尺度および順応性尺度に

において、C1がC2よりも得点が有意に高かった（否定的感情反応： $t(46)=3.68, p<.001$, 順応性： $t(59)=7.55, p<.001$ ）。また、外向性尺度において、C2がC1よりも有意に高かった（ $t(59)=3.75, p<.001$ ）。神経質尺度、規則性尺度、注意の転導性尺度については、C1とC2で尺度得点に有意な差は認められなかった。つまり、気質特徴のC1は、痲癩が激しく、不機嫌など否定的な感情を激しくあらわし、新しい環境や人に慣れにくく、臆病で大人しい気質特徴を示す子どものグループであり、いわゆる育てにくい、扱いにくい気質特徴を示すと考えられた。C2は、穏やかで機嫌がよく、人見知りをせず、積極的で、身体を使った活発な遊びや人と遊んだりすることを好む気質特徴を示す子どものグループであり、いわゆる育てやすい、扱いやすい気質特徴を示すと考えられた。

3.2 気質特徴の違いによるベビーマッサージ体験後の養育者の気づきや思い

自由記述質問紙より得られた回答について、育てにくい、扱いにくい気質特徴（C1）の38名と育てやすい、扱いやすい気質特徴（C2）の23名の養育者に分けて、子どもの気質特徴に合ったベビーマッ

サージを体験した後の気づきや思いについて、自由記述の内容を整理した（表2）。

自由記述の内容について、KJ法を用いて分類した結果、合計15のカテゴリーが生成された。C1の子どもと、C2の子どもに共通したカテゴリー数は10であった（表2）。またC1独自のカテゴリーは3つ、C2独自のカテゴリーは2つであった。共通したカテゴリーについては、“寝る前にベビーマッサージを…がんばって続けていこうと思う”（C1），“マッサージは継続し、二人だけのふれあいの時間は大切にしていこうと思います”（C2）等、【日常生活への取り入れ】や、“…できるだけそばにいて目を見て話しかけるようになった”（C1），“…大らかな気持ちで向き合えることが増えました”（C2）等、【子どもへの関わり方の変化】があった。また、“スキンシップの時間が増えました”（C1），“スキンシップでお互いに心が落ち着くような気がしました”（C2）等、【親子でふれあう時間の大切さへの気づき・増加】や、“…泣く回数が減った”（C1），“…子供の笑顔が増えて、声を出してよく笑うようになった気がします”（C2）等、【子どもの行動の変化】，“…教えてもらってよかった”（C1），“…このように本人にあった気

表1 各クラスターの気質特徴の平均値および標準偏差

	全体 ($n=61$)	クラスター1 (C1) ($n=38$)	クラスター2 (C2) ($n=23$)	t 値
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	
否定的感情反応	2.09 (0.57)	2.28 (0.51)	1.77 (0.52)	3.68**
神経質	2.36 (0.41)	2.32 (0.42)	2.43 (0.40)	0.93
順応性	2.52 (0.68)	2.88 (0.53)	1.91 (0.40)	7.55**
外向性	2.99 (0.41)	2.85 (0.37)	3.22 (0.38)	3.75**
規則性	3.19 (0.40)	3.21 (0.44)	3.15 (0.34)	0.62
注意の転導性	3.25 (0.43)	3.22 (0.44)	3.30 (0.43)	0.72

** $p < .01$

表2 KJ法による気質特徴タイプ（クラスター）ごとの自由記述の分類

カテゴリー名	クラスター1 (C1)		クラスター2 (C2)	
	人数 (38人中)	割合 (%)	人数 (23人中)	割合 (%)
日常生活への取り入れ	22	21.36	6	10.91
子どもへの関わり方の変化	13	12.62	9	16.36
親子でふれあう時間の大切さへの気づき・増加	13	12.62	6	10.91
子どもの行動の変化	11	10.68	7	12.72
本マッサージへの肯定的評価	10	9.71	5	9.09
子どもへの見方の変化	8	7.77	6	10.91
子どもの体の冷えへの気づき	4	3.88	1	1.81
子どもの気質への注目	3	2.91	3	5.45
親子関係の肯定的変化	3	2.91	2	3.64
育児に対する自信向上	1	0.97	2	3.64
各本マッサージへの子どもの肯定的反応	7	6.80		
各本マッサージ実施の困難さ	6	5.83		
各インストラクターとの交流に対する肯定的評価	2	1.94		
これまでの育児全般の振り返り			7	12.72
変化なし			1	1.81

質に沿って出来るベビーマッサージはその効果が2倍も3倍も違うと感じました”(C2)等,【本マッサージへの肯定的評価】が見られた。さらに“…「また動いて」…と疲れていたけれど,「気質なんだよ」と前向きにとらえようと…”(C1),“…気付いていなかった彼の良いところに気付くことができたと思っています”(C2)等,【子どもへの見方の変化】や,“お尻が冷えていることが分かった…”(C1),“…先生に「少し冷え症」と教えていただき,家でもケアをするようになりました”(C2)等,【子どもの体の冷えへの気づき】や,“「外向性」や「注意の転導性」の得点が高く意外…”(C1),“思いのほか,切りかえのはやさがきわだっていたので,なるほど〜♪と思いました”(C2)等,【子どもの気質への注目】があった。そして“…前以上に距離が縮まったような気がします”(C1),“子供との距離が近くなり,何を言っているのかなんとなく分かるようになりました”(C2)等,【親子関係の肯定的変化】や,“…私自身が育児に対して少し自信が持ててきたように思います”(C1),“…少し子供によりそった子育てができそうな気がして自信が少しつきました”(C2)等,【育児に対する自信向上】という記述が見られた。

このように同じカテゴリーが見られたものの,その回答の割合はクラスター間で異なっていた。例えば,本マッサージの【日常生活への取り入れ】についての養育者の報告の割合は,C2では10.91%であったが,C1の子どもでは21.36%とC2の子どもの約2倍であった。また,【子どもの体の冷えへの気づき】についての養育者の報告は,C1の子どもでは3.88%であったのに比して,C2の子どもでは1.81%であった。

C1の子どもの独自のカテゴリーについては,“足があたたまる気持ち良さそうにしていた”(C1)等,【本マッサージへの子どもの肯定的反応】や,“…なかなか思うようにレッスンがうけられませんでした”(C1)等,【本マッサージ実施の困難さ】,“インストラクターの先生に…大変さを共感してもらえたことがうれしかった”(C1)等,【インストラクターとの交流に対する肯定的評価】という記述が見られた。一方,C2の子どもの独自のカテゴリーについては,“…子どもとゆったりした気持ちで向き合えていない時もある,ということに気付きました”(C2)等,【これまでの育児全般の振り返り】や,“まだ背中,おなかマッサージをしだして,変化までは見あたらないうです”(C2)等,【変化なし】という記述が見られた。

以上の結果から,育てにくい,扱いにくい気質特

徴(C1)の子ども,育てやすい,扱いやすい気質特徴(C2)の子ども,どちらの養育者も,本ベビーマッサージを受けたことで,子どもへの見方や関わり方という側面において育児認識が変わったことを報告していた。しかし,育てにくい,扱いにくい気質特徴(C1)の子どもの養育者は,特に本マッサージを子どもへの具体的対応の一つとして日常生活に取り入れたり,取り入れたいという希望を報告していた。一方で,育てやすい,扱いやすい気質特徴(C2)の子どもの養育者は,本マッサージがこれまでの育児全般を振り返るきっかけになっていた。

4. 考察

本研究は,育てやすい,扱いやすい気質特徴と育てにくい,扱いにくい気質特徴という2つの気質特徴のタイプをとりあげ,それぞれのタイプに適合したベビーマッサージを行うことで,養育者が育児をする上でどのような気づきがあるのか,また養育者自身や子どもの変化に対してどのような認識を抱くのかを明らかにし,より効果的な気質特徴のタイプごとの適切な導入方法や助言内容を検討することを目的として実施した。

とりあげた2つの気質特徴の具体的な内容は,痲癢が激しく,不機嫌であり,新しい環境や人に慣れにくい気質特徴を示す,育てにくい,扱いにくいタイプと,機嫌がよく,積極的で,活発な身体を使った遊びを好み,他者と遊んだりすることが好きな気質特徴を示す,育てやすい,扱いやすいタイプである。自由記述の結果からは,育てにくい,扱いにくい気質特徴を示す子どもの養育者においてのみ,当日マッサージをすることが困難だったという記述が見られ,養育者がなんらかの方法で関わろうとしても,関わりにくいという子どもの特徴が表れている可能性が考えられた。しかし,養育者自身が関わりにくいと感じている可能性が考えられる一方で,気質特徴に適合したベビーマッサージを体験した後は,育てにくい,扱いにくい気質特徴の子どもの母親は,特に子どもへの具体的対応のひとつとして日常生活のなかに実際に取り入れたり,取り入れたいという希望を報告していた。つまり,育てにくい,扱いにくい気質特徴を示す子どもの養育者の場合,育てにくい,扱いにくい気質特徴を示すために,気質特徴に適合したベビーマッサージを体験後,子どもへの新たな対応のひとつとして取り入れるようになると考えられる。また,育てにくい,扱いにくい気質特徴を示す子どもの養育者には,子どもの身体の冷えについての記述がより多く見られた。これまで,気質特徴は,子どもの行動特徴という点から検

討されてきたが¹³⁾、本結果から冷えという身体的側面からも捉えられる可能性が示唆され、気質特徴に適合したベビーマッサージを実施することによってどのような効果があるのかを検証する必要があると考えられる。

一方、育てやすい、扱いやすい気質特徴の母親においては、気質特徴に適合したベビーマッサージがこれまでの育児全般を振り返るきっかけになっていた。育てやすい、扱いやすい気質特徴を示す子どもの養育者の場合は、気質特徴に適合したベビーマッサージの体験をきっかけとして、これまでの自分自身の育児全般を見直すようになると考えられる。

さらに、育てにくい、扱いにくい気質特徴の子どもの養育者も、育てやすい、扱いやすい気質特徴の子どもの養育者も、気質特徴に適合したベビーマッサージを体験したことで、子どもへの見方や関わり方という側面において認識が変わったことを報告していた。つまり、気質特徴によらず、気質特徴に適合したベビーマッサージを体験することによって、子どもの特徴への気づきにつながることで、自身がどのように子どもに関わるかについて考えるきっかけになると考えられる。

以上のことから、子どもの気質特徴によらず、気質特徴に適合したベビーマッサージは、子どもへの

見方や関わり方という側面において認識を変化させる可能性があることを伝え、“育てにくい、扱いにくい”気質特徴を示す子どもの養育者の場合には、より積極的に子どもへの具体的対応方法のひとつとして提案すること、“育てやすい、扱いやすい”気質特徴を示す子どもの養育者の場合には、気質特徴に適合したベビーマッサージをきっかけに育児全般について振り返ることや考えるきっかけとして提案していくことによって、取り組みを促進したり、スムーズに導入できるのではないかと考えられる。

本研究によって、日常生活のなかで養育者が抱く育児不安や育児自己効力感に一定の効果をもたらす子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージを効果的に導入するための示唆を得ることが出来た。しかし、本研究では育児不安や育児自己効力感の肯定的変化が生じるメカニズムが、子どもの気質特徴によって異なるのか否かは検討できていない。また、通常のベビーマッサージと比較して子どもの気質特徴に適合したベビーマッサージが、気質特徴の違いによって、養育者にどのような気づきを与えるのかについては明らかにできていない。今後、これらの点について検討を進めていく必要があると考えられる。

謝 辞

本研究にご協力いただきましたお母様、お子様、研究協力をしてくださったベビーマッサージインストラクターの久松ひろ子様、長谷栄子様へ心より感謝申し上げます。

本研究は、平成28年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受けて実施した。

本研究に利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 水野里恵：乳児期の子どもの気質・母親の分離不安とのかの育児ストレスとの関係：第一子を対象にした乳幼児期の縦断研究。学研究，9，56-65，998。
- 2) 水野里恵：乳幼児の気質研究の動向と展望。愛知江南短期大学紀要，32，109-123，2003。
- 3) 武井祐子，寺崎正治，門田昌子：幼児の気質特徴が養育者の育児不安に及ぼす影響。川崎医療福祉学会誌，16，221-227，2007。
- 4) 武井祐子，寺崎正治，高尾堅司，門田昌子：養育者との面接からとらえた育児不安についての質的研究。川崎医療福祉学会誌，18(1)，219-225，2008。
- 5) 光盛友美，山口求：養育期における母親の子ども虐待の予防に関する研究—ベビーマッサージを体験した母親と体験していない母親との比較検討—。日本小児看護学会誌，18，22-28，2009。
- 6) 大葉ナナコ：母子保健事業で生かすベビーマッサージ [1] ベビーマッサージの定義と効果。地域保健，56-65，2004。
- 7) 梶美保：乳児保育におけるベビーマッサージの可能性に関する一考察。高田短期大学紀要，26，73-82，2008。
- 8) 武井祐子，門田昌子，奥富庸一，竹内いつ子，岡野維新，岩藤百香，寺崎正治：気質特徴に適合したベビーマッサージプログラムが養育者の育児不安および育児自己効力感に及ぼす効果の検討。小児保健研究，80，38-45，2021。
- 9) Yuko Takei, Masaharu Terasaki, Masako Kadota, Yoichi Okutomi and Itsuko Takeuchi: Effects of baby Massage Based on Child's Temperament Characteristics on Child-Rearing. *Kawasaki Journal of Medical Welfare*. 22,

33-45, 2016.

- 10) 高濱和子, 渡辺利子: 母親が認知する歩行開始期の子どもの扱いにくさ—1歳から3歳までの横断研究. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 3, 1-7, 2006.
- 11) 武井祐子, 寺崎正治, 門田昌子: 幼児気質質問紙作成の試み. パーソナリティ研究, 16, 80-91, 2007.
- 12) 武井祐子, 久松ひろ枝, 門田昌子, 影山翔子: My ふれあい Book. 未公刊, 2017.
- 13) Thomas, A., Chess, S. and Birch, H. G. : Temperament and behavior disorders in children. New York University Press, New York, 1968.

(2021年5月21日受理)

Effects of Baby Massage Tailored to Each Child's Temperament Traits on Parents' Awareness and Recognition in Child-rearing

Yuko TAKEI, Masako KADOTA, Itsuko TAKEUCHI, Momoka IWADO,
Ishin OKANO and Masaharu TERASAKI

(Accepted May 21, 2021)

Key words : temperament, baby massage, parents' awareness in child-rearing, parents' recognition in child-rearing

Abstract

This study examined the effects of caregivers experiencing baby massage suitable for each child's temperament traits on parents' awareness in raising children and recognizing changes in themselves and their children, depending on the two types of temperament traits, and aimed to propose effective introduction methods of baby massage. Results of analyzing 61 respondents indicated that they developed an awareness of their children's characteristics, which allowed them to think about how they should interact with their children, regardless of the temperament traits. Parents having children with difficult to handle temperaments tended to raise children based on the child's temperament traits, whereas parents having children with easy to handle temperaments tended to review general child-rearing behaviors while being conscious of the child's temperamental traits. It was concluded that different methods of introduction should be adopted when caregivers experience baby massages suitable for each child's temperamental traits, based on their temperament traits.

Correspondence to : Yuko TAKEI

Department of Clinical Psychology
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : takei@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.31, No.1, 2021 73-79)